

資産作りの 新常識

まさおか としゆき
正岡 利之 (MUF G資産形成研究所長)



1982年、三菱信託銀行(現三菱UFJ信託銀行)入社。主に年金や投資信託を中心として、資産運用業務に携わる。2015年より同社で金融教育業務に従事。18年8月より現職。



金利の低下は債券価格の上昇に

「債券」

「債券」といっても、なじみが薄いかもしれない。代表的なのは国が発行する国債だ。会社の発行する債券は、社債と呼ぶ。どちらも発行者側からすると資金を得るための一つの手段である。購入者側からすると、多くの場合「定期的に利息がもらえて、満期時に元本が戻ってくる」という点で、定期預金と似たものだ。しかし、定期預金とはかなり異なる部分もある。

債券が新規に発行される時、償還日(満期)と表面利率(クーポンレート)が決められる。表面利率はそのときの市場実勢で決められる。例えば図のように、債券Aが、そのときの市場実勢の金利水準に基づいて、表面利率2%で発行されたとする。固定利付き型の債券の場合、表面利率は満期まで変わることはなく元本100万円に対して、1年間に利息2万円を受け取れる。

しかし、市場の金利水準は変化していく。仮に債券Aの発行後に、債券Bが発行されて、そのときの市場の実勢金利に基づく表面利率が1%になったとする。元本100万円に対して、債券Bの1年間に受け取れる利息は1万円だ。

債券Aと債券Bが同じ種類の債券で、同じ償還日とする。受け取れる利息の金額は債券Aの方が多いため、受取利息だけ見れば、債券Aが魅力的だ。そこで、債券Aの価格は高くなり、最初の100万円では買えなくなる。債券Aで受け取れる利息が多い分、債券Bよりも高い価格がつく。

外貨建ては為替リスク

つまり債券Aは市場金利の低下によって、債券価格が上昇したことになる。このように金利の低下は債券価格の上昇要因となるのだ。投資を例にとると、その中には複数の債券が保有されている。それぞれの債券を必ず満期まで持ち続けるわけではない。金利見通しや銘柄ごとの割高・割安などによって、そのときの価格によって売

買されている。また、投信の価額は、保有する債券の価格で決まる。

債券価格が決まる仕組み

(表面利率の高い債券Aの魅力が増して価格が上昇する)

利息が多くもらえるので、価格が上昇

(最初に発行された債券)

(後で発行された債券)

債券A

(元本100万円)
表面利率2%

利息2万円

債券B

(元本100万円)
表面利率1%

利息1万円

債券には外貨建てもある。その場合、満期時の償還金額や利息として受け取れる金額は、為替の影響を受ける。債券を買ったときよりも円高が進んでいけば、元本は目減りし、利息も減る。円安なら、その逆だ。

また、債券の場合、発行体の信用面でのリスクを伴う。償還金が戻ってこないといった信用リスクを伴っている分、国債でも社債でも、信用力が低いほど利回りは高くなる。

(出所)三菱UFJ信託銀行